古代史散策

No. ０２８

葛城古道南部

葛城の古き神々達

パナソニック電工松寿会
古代史散策部

昭和58年10月作成
平成10年 3月復刻
平成29年 3月ﾊﾟｿｺﾝ版作成

≪ コ ー ス ≫　８．２km

近鉄御所 ―ﾊﾞｽ― 風の森峠― 高鴨神社― 御歳神社―
小殿―ﾊﾞｽ― 鴨都波神社― 近鉄御所　…解散

≪ 総 説 ≫

葛城山の東麓一帯は、かって高尾張(たかおはり)とも鴨(かも)（加茂，甘茂）とも呼ばれ、最終的に葛木(かつらぎ)（葛城）と名付けられて今日に至っている。古代地名は、そこに蟠居(ばんきょ)した古代豪族の名前により呼ばれたに相違なく、大和三山を眼下に見下ろすこの地名の変遷は、天皇家の大和進出よりもさらに古く、多くの古代豪族達の興亡の歴史の姿を明らかに示している。地名はまさに“古代史をひもとく索引”なのである。

「鴨」なる地名は、御所市内から風の森峠付近にかけて特に多く残っており、大字鴨神を始め鴨浦，鴨口などの小字があり、江戸初期刊行の「大和名所図絵」には上鴨，中鴨，下鴨の地名が見える。

上鴨には高鴨神社を筆頭に国つ神（土着神）を祀る古社が、中鴨には御歳神社，一言主神社を始め名柄，鴨山口，駒形大重の各神社が、下鴨には鴨都波神社などめじろ押しに並んでおり、いずれの社も天照系よりさらに古く、その殆どが出雲系の鴨氏にかかわる神社であって、 延喜式内名神大社は７社を数える。

この事は、天皇家と雖(いえど)も後世まで出雲系種族を無視し得なかったことを雄弁に物語っているのである。これに反して尾張氏や葛城氏の祖神に係わる神社は殆ど見当たらぬのであっ

て、古代豪族達と天皇家の力関係を物語る証と思われ興味深い。後には天皇家の有力な領有地となった葛城御県であるにも拘らず、これに係わる祭神もこの地には殆ど祀られていないことは、何を物語っているのであろうか。

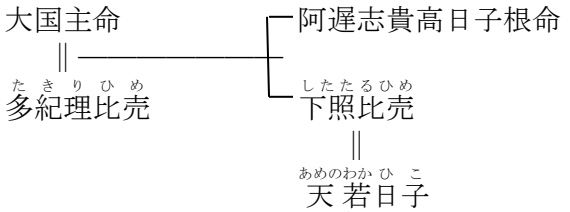
《 各 説 》

【 風 の 森 峠 】　　御所市鴨神・東佐味

風の森峠は、古代南海道中の急坂の難所の一つであった。坂や峠の彼方は旅する人々にとっては、先の判らぬ不安に襲われたところだったに違いない。特にこの峠は葛城山から吹き下ろす強い西風が木立ちを震わせうなり声をあげて、旅人の心細い魂に襲いかかる恐れの道でもあった。峠の頂に、旅の安全を祈願する手向けと風神の荒さぶる神意を鎮める社（志那津比古神社・風の森神社）が、今も静かに鎮座している。近年国道 24 号線改修の際、峠の道は平削されて往時をしのぶよすがもない。

【高鴨神社（式内名神大社）】　　御所市鴨神

祭神は、阿遅志貴高日子根命（書紀：味鉏高彦根）



皇孫　迩々芸命の降臨に先立って、高天原では中っ国の偵察にまず天若比売を、次いで天若日子を降したが、共に復命せず、天若日子は大国主命の娘 下照比売をあてがわれ高天原に反逆、高木の神（高御産巣日神）の放った矢に当たって殺される。若日子の父母達が喪屋を造って喪を弔う時に、阿遅志貴は妹婿の喪を弔いにやってきた。二柱の神の容姿が似ていたために「若日子は死んでいない」と、勘違いした父母達は嬉し泣きして阿遅志貴の手足に取りすがった。

阿遅志貴高日子根はいたく怒り「吾は仲良い友なれこそ弔い来つらくのみ。なんぞ吾を穢き死人に比ふる」と言いて、十掬の帯剣を抜いて喪屋を切り伏せ、足で蹴散らして立ち去った。そこは美濃の藍見川の川上の喪屋だとある。

阿遅志貴高日子根の神は、天皇家から「大御神」と最高の尊称を奉られているのにも拘らず、その功績を示す何一つの説話も残っていない。出雲国造神賀詞では「己（大国主）の命の御子 阿遅須伎高日子根の御魂を、葛木の鴨の神奈備に坐させ、皇孫命（天皇）の近き守り神 と貴り置き云々」とあるが、おそらく天皇側の行動の監視をさせしめたのではなかったか。天皇家側は、うわべでは「大御神」と最大級の敬いをし、裏ではその功績を消し去ったと考えられぬでもない。

【 御 歳 神 社 】　　御所市栗阪

主祭神：御歳神、配祀神：大歳神・高照姫命

魏志倭人伝の原資料になったであろう　魏畧に「その（倭）

俗　正歳四時を知らず。但し春耕と秋収を記して年紀（一年）となす」とあり、春の種蒔きと秋の収穫の期間を太古の日本人は“歳”と云っていた。だから歳とは農耕を意味し、従って御歳神，大歳神は国霊神であり農耕神である。

古事記では須佐男命と大山津見の娘で、木花咲耶比売の妹の神大市比売の間の子が大歳神、大歳神と香用比売との間の子が御歳神とある。

平安初期に忌部広成の撰した私史「古語拾遺」によると、昔神代に土地の農家が田作りの労をねぎらって牛肉を振る舞った時、これを見ていた御歳神の子神は、欲しくてたまらず父神に告げた。父の御歳神は、子神に牛肉を与えぬことを怒って田に蝗を発し、忽ち稲は枯れて篠竹のようになった。大地主の神は巫子の占いにより、御歳神の祟りとして白猪，白馬，白鶏を御歳神に献じて、神の怒りが解けるように祈ったところ、田は再び豊作となった。

現在この地では、竹の先に杉葉と神社の御守りをつけて苗代に立て蝗除けの神事を行っている。

中鴨の地には、八咫烏こと賀茂建角身命も定住していた。山背国風土記（逸文）によると「賀茂建角身命は、大和の葛木の峰に宿りまして、それより漸く山代の国岡田の賀茂に遷り、山代河に従って葛野川と賀茂川の出会うところに至った」とあって、京都上賀茂，下賀茂には賀茂の県主がいたがその故地が大和の中鴨であることを示している。

【鴨都波神社　式内名神大社】　　御所市御所

鴨都味波八重事代主命・下照姫命を祭神とする社。

“鴨都味波”は「鴨の水端」“八重事”は「しばしばの折り目」“代”は「稲代」の意かと云われ、「鴨の水辺で、折り目ごとに祀られる田の神」の社だ、との説は単なる語呂合わせとしか思えない。やはり出雲系の大国主命の長男の事代主命を祭祀したのではあるまいか。また前述の高鴨神社の祭神も、日本書紀に「味鉏高彦根」とあり、“鉏”は農具であるから「高鴨神も農耕神だ」との説も、古代に文字を持たなかったわが国では、漢字の音や意味を借用して大和言葉を表したのであって、文字から考案したこれらの説は何の意味もない。従ってかかる仮説は全て牽強付会（こじつけて自分の都合のよいようにつなぎ合わせること）の説に過ぎないと考える。

この社の鎮座地の小字掖上は「弓月君（秦氏の祖）に朝津間（現朝妻）の掖上の地を賜った」とあり、掖上は元は相当に広大な地だったと思われ、また古事記に、第５代孝昭天皇の御陵を「掖上博多山上陵」とし、その宮居を「葛城掖上宮」としており、書紀でも宮居を「掖上池心宮」としていて、現在の“池の内”の辺りと云われ掖上はさらに東部迄を含んでいたことになる。おそらく「掖」は湧くの意であろうから、下鴨の地は早くより開け弥生期にはいち早く農耕も行われていたらしい。

《　鴨 都 波 遺 跡　》

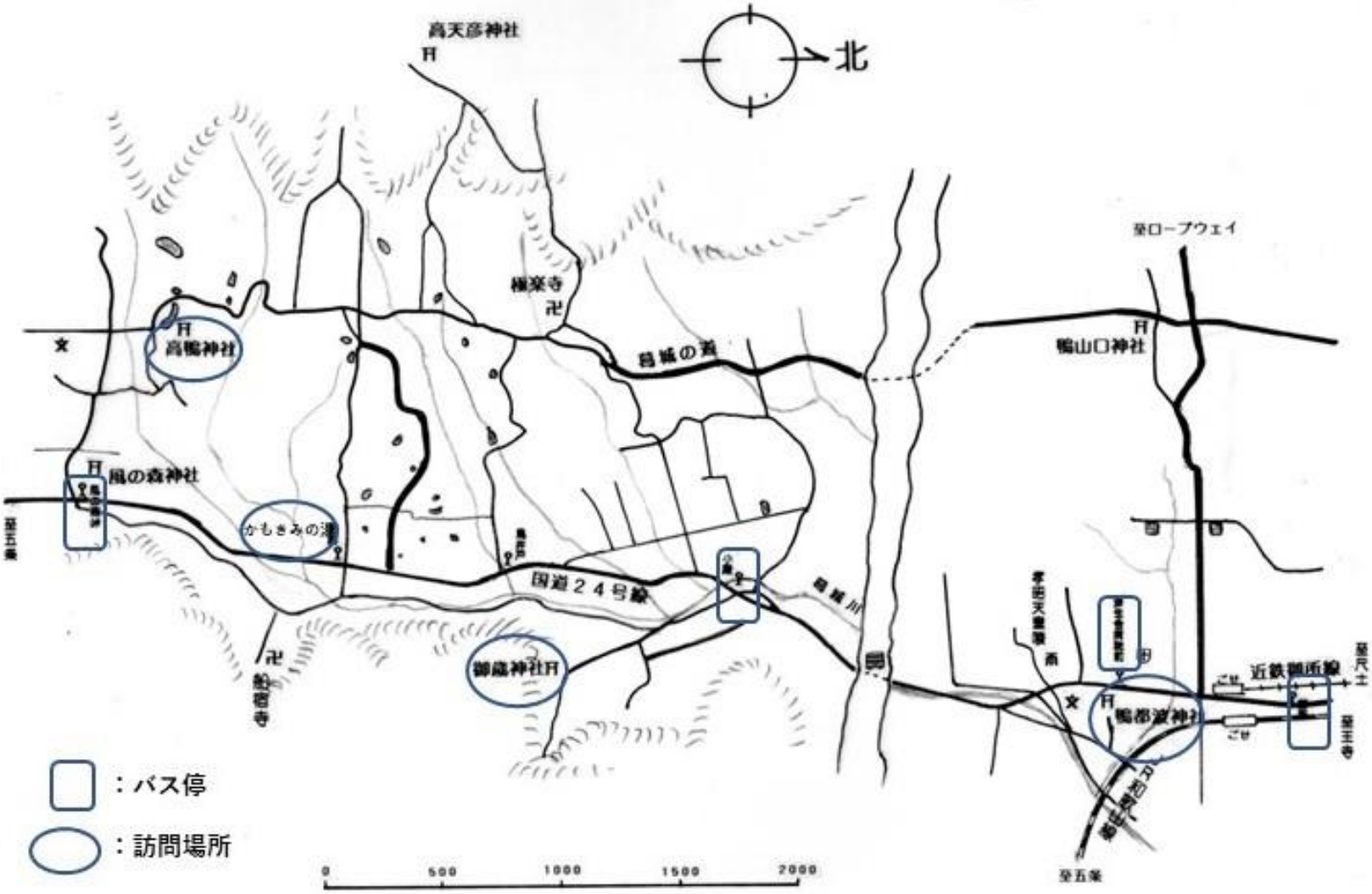
昭和 35 年に国道 24 号線新設と御所警察署新築工事に際して、橿原考古学研究所により発掘調査が行われ、警察署の正門予定地付近から神社の境内一帯にかけて、多数の土器，石器が出土し、米，桃や動物の骨など、高床住居（倉庫か）と思われる柱列のほか、溝跡には矢板と呼ばれる柵状の施設も見出され、木製の竪臼，木槌，弓なども出土し、弥生中期～後期（紀元前 200 ～後 100 ）の大規模な住居跡であることが判った。

作成　西村　誠　改訂・復刻　末岐敏一
ﾊﾟｿｺﾝ版改訂　宮下章宏

《葛城の式内名神大社・大社》

郡名	神社名	主神	社格
葛上郡	鴨都波神社	事代主命，下照比売	名神
	葛城坐一言主神社（かつらぎにますひとことぬし）	一言主命（ひとことぬしのみこと）	〃
	〃　御歳神社	御歳神，大歳神	〃
	〃　水分（みくまり）神社	天水分神	〃
	高天彦（たかまひこ）神社	高天彦	〃
	巨勢（こせ）山口神社	大山津見神	大社
	高鴨神社	阿遅志貴高日子根	名神
	鴨山口神社	大山祇	大社
葛下郡	片岡坐神社	豊受大神	名神
	火幡神社	？	〃
	葛城倭文坐天羽槌神社	天羽槌雄命	大社
	長尾神社	白雲別命	〃
	石園坐多久虫玉神社	建玉依彦，建玉依比売	〃
	調田坐一言尼古神社	一言主命	〃
	金村神社	高御産巣日神	〃
	当麻山口神社	大山津見神	〃
	大坂山口神社	大山祇命	〃
	葛城二上神社	武甕槌，大国魂神	〃
忍海郡	葛城坐火雷（ほのいかづち）神社	火雷大神，埴安姫（はにやすひめ）	名神

名神大社　9社，大社　10社　　計19社


北
高天彦神社
極楽寺
高鴨神社
風の森神社
かもきみの湯
国道２４号線
御歳神社
鴨山口神社
至ロープウェイ
鴨都波神社
近鉄御所線
至五条
：バス停
：訪問場所
0
500
1000
1500
2000